

JICA シニアボランティア 千葉

SVニュース千葉 第35号

2021年10月2日発行

千葉県JICAシニアボランティアの会
chibajicasv02@gmail.com

本号目次

公開講演会・ 定期総会報告	1-2
出前講座	2
会員だより	
三輪 達雄	2-3
白鳥 貞夫	3-4
品川洋之助	4-5
竹花 晃	6-8

公開講演会・2021年度総会を開催

2021年5月15日(土)、浦安市国際センターにおいて、当会の年次総会と、第27回公開講演会を行ないました。昨年度は新型コロナ感染拡大の為、総会はオンラインで実施、公開講演会は中止しましたが、本年度は、会場の浦安市が、まん延防止重点措置の対象都市に指定されている厳しい状況下ではありますが、可能な限りの感染防止措置を行い、参加者を20名に限定(定員60名)し、開催することいたしました。

公開講演会は、一般市民にも開放し、ご参加を頂きました。また、会場に来られない方々のために動画配信を行うという対応も取り、同時配信で143名の方が視聴されました。

この講演会は、JICA東京センター及び浦安市国際センターと共催し、千葉県、浦安市、および浦安市教育委員会の後援を受けて実施しました。

第27回公開講演会



今回の講演会では、昨年中止した公開講演会で講師をお願いしていた、露木雅美氏に再度依頼し、治安問題がたびたびニュースに取り上げられ、実情もよく伝わってこないパキスタンについて、最近の実情を話してもらいました。

・露木雅美講師について

露木氏は、青年海外協力隊員としてケニア国の建設省で活動後、JICA 専門家として長く国際協力事業に従事、中小企業振興や若手人材育成支援にあたってきた方です。

滞在国はアフリカ、アジア、中南米、中央アジアの 20 数か国に及び、各国の社会経済発展の開発事業に従事し、現在は OPC(株)に取締役として、技術部海外コンサルタント部に所属しています。

2018年4月から2021年3月までの3年間に亘って、パキスタン国のパンジャブ州国立工業短期大学機械学科の能力向上を目的とした技術協力プロジェクトに参加し、工業系大学の技術指導員へのマスタートレーニング、マニュアル改訂作業及び最先端産業機材(指導員訓練用機材)供与事業に携わりました。

・講演概要 題目:「活気あふれる国 パキスタン」

前述の活動報告のほか、我々に余り馴染みのないパキスタンの人々の暮らしぶり、食べ物、交通事情、教育問題、女性の

社会進出等、現地の人々の姿を、露木氏の視点から話してもらいました。

(ホームページ参照 <http://www.chibajicasvob.com>)

2021年度通常総会

来賓として、JICA東京センター所長 田中泉氏、同市民参加協力第1課 柿沼潤氏、浦安市国際センター・センター長 渡辺静雄氏、JOCV OB会事務局長古関伸之氏に御臨席いただき開催しました。

総会は当日参加18名、委任状参加37名、計55名の参加があり、会員総数78名の過半数の参加を確認、有効に成立しました。

総会では、三輪会長の挨拶に続き、三輪会長を議長とし、2020年度の活動報告、会計報告、2021年度活動計画、予算、役員人事等の議案を審議、すべての議案が承認されました。



出前講座レポート (2021年2月～2021年7月)

「多様な国、多様な人々を理解しよう」

－ 国際協力とボランティア活動そしてSDGs －

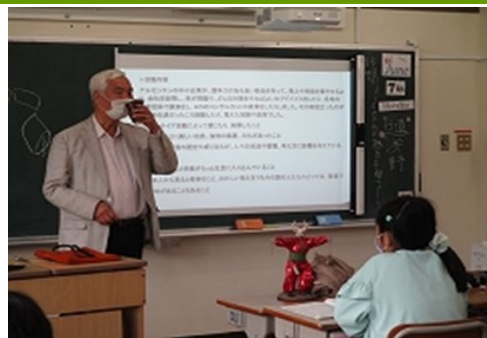
2021/6/7 (月) 講師 中西陽典

柏市立富勢東小学校で、6年生の国際理解教育の一環として、出前講座を行いました。世界には多くの国があり、それぞれの国では、その国の風土、歴史、文化、習慣に基づき、多様な暮らしをしていることを説明したうえで、1例として、赴任先のアルゼンチンの人々の暮らしや考え方、自然、食べ物等を紹介しました。

またJICAシニアボランティアとしての自身の活動も簡単に紹介したうえで、国際協力の意義や様々な形での国際協力の形態があることを説明しました。具体例として、開発途上国で現地の人々と共に生活し、同じ目線で途上国の課題に取り組むJICAのボランティア活動についても話しました。

そのうえで、2015年の国連決議に従って、世界中の人々が誰一人残さず、安心安全に暮らせる持続可能な、より良い世

界を実現する為、国や国際機関、各地方の自治体や企業、グループ、個人が、自分たちに出来る活動をしているSDGsについて説明しました。



SDGsの活動、それを通じた世界平和への貢献に対して、生徒の皆さんにも出来る事が何かないか話し合いをしました。

生徒の皆さんが興味深く、集中して講演を聞いてくれたことに感銘を受けました。持参したドミニカ共和国の民芸品やアルゼンチンの民族衣装、民芸品にも興味津々で、写真や具体例を用いて、出来るだけ分かり易く説明したことで、生徒も良く理解できたようです。

会 員 だ よ り

命の選択 －生命体とウィルス－

三輪 達雄 (2013-15 ブータン 協同組合)

「パンデミック」や「ロックダウン」などの言葉を聞くと、乳牛の獣医師という職業柄、2010年に発生した「口蹄疫」を思い起こさせるを得ません。その当時、酪農協の全国組織で対策委員長として口蹄疫の処理を担当していました。その最中は処理に必死で考えが及ぶもみませんでしたが、今、新型コロナが発生して「パンデミック」などの言葉を再び聞くと、あの当時の処理が正しかったのかと考えさせられる今日この頃です。

同じウィルスと言っても、コロナウィルスと口蹄疫ウィルスでは違いがあります。そもそもウィルスとは、自分では増殖できず宿主の生命体の細胞で生存増殖するので、種特異性があり、基本的に人類のウィルスが他の動物に感染することは非常に稀で、その逆もまた非常に稀なのです。事実、口蹄疫ウィルスは偶蹄類の病気であり、牛や豚などの蹄が2つに分かれている哺乳類に感染するウィルスで、人間への感染は英国で屠場の職員の感染が記録されているだけです。口蹄疫ウィルスはピコルナウィルスに属し、空気感染をするため感染の拡大スピードが非常に速くなります。口蹄疫の処置については、同居動物の一斉殺処分が大々的に報道されたので、恐ろしい病気であると思いがちですが、実は牛の致死率は数%であり、予防ワクチンもあるのです。

実は、私は派遣国であるブータン王国で、口蹄疫にかかっている牛に出会いました。そもそもブータン王国では仏教を深く信仰

しているため、仏教の戒律「不殺生戒」を守り、生き物を殺しません。飲み水に入ったハエは逃がしてあげるし、腕にとまった蚊を叩いたりしません。日本では、乳の出が悪くなったり、病気で痩せてしまったりして経済性が悪くなると、淘汰と称して屠殺してしまうのが普通になっていますが、ブータン王国では歳を取って使い物にならなくなった動物でも淘汰はしません。ブータンの人にとっては、同じ仏教徒である日本が、安易に家畜を淘汰するのが理解できないようです。「なぜワクチンを使わないのか?」、ブータンの畜産関係者から問われて、答えられませんでした。

人類の進化を見てみると、我々は何度もウィルスに出会っているはずですが、しかし、基本的にウィルスは宿主がいないと生き残れないので、宿主を徹底的には殺さないはずですが、また、強力なウィルスが出現したとしても、集団間の接触が希薄であった頃は、人類全体に拡散することはなかったでしょう。ということは、パンデミックは農業の発展によって人口密度が高くなり、交易が盛んになり他集団との接触が密になった結果なのでしょう。

米国では、コロナによる死亡者が第1次世界大戦、第2次世界大戦及びベトナム戦争での死亡者を越えたと言われている。人類が増殖していくなかで、その拡大を食い止めるのは戦争などの争いか、伝染病であると言われています。アメリカンインディアンやインカ帝国を滅亡に追い込んだのも、銃と伝染病であったと言われています。パンデミックは、地球上の生命の「自然の淘汰」の仕組みなのかもしれません。特にコロナウィルスは次

世代を担う若者は軽症で済むのに、高齢者は重症化するということはなにか意図的なものを感じます。

あえて暴言を言えば、口蹄疫では死ぬことがなかった牛が屠殺され、新型コロナウィルスでは死ぬ運命にあったかもしれない高齢者が助かるという矛盾は、人間中心の考え方が起こしたものなのかもしれません。ウィルスを徹底的に抑え込むことが大事なことなのはもちろんですが、文化のあり方をもう一度見直すことも必要なのかもしれません。

もともと仏教徒である日本人は、「自然を克服するのではなく自然と調和する。」という方法で自然と接してきたと思います。しかし、西洋化が進んでいくにつれ、キリスト教的人間中心の考え方に変わっていき、自然保護という考え方も人間中心の、あえて言えば「上から目線の自然保護」になっている気がします。「菜食主義」という方がいらっしゃるいますが、もし動物の命を大切にするための「菜食主義」だとすれば、ずいぶん「上から目線」で

す。植物にも命はあります。純粋に「すべての命を平等に尊重する」という仏教の考え方では、人間に限らずすべての生命は他の生命の犠牲の上に生存しているという原罪を意識しているようです。

最後に、ブータン王国を一躍有名にした「ポブジカ谷の鶴」の話をして。ブータン王国では、政府が全国民に電気を供給することを約束しています。ポブジカ村にも電気工事の案内が来ましたが、村民はその工事を拒否しました。その理由は、ポブジカ村はヒマラヤ山脈を越えてわたってくるオグロ鶴の生息地だからです。村に電線を張り巡らせれば、鶴がひっかかって怪我をするかもしれないと村民は恐れ、自分たちは不自由するけれど電気工事を拒否したのです。自然保護、野生動物の保護を唱える人は多くいますが、ここまでの覚悟があるでしょうか。

（この話には後日談があり、この話を聞いた全世界から寄付金が集まり、ポブジカ村の電線はすべて地中化されたそうです）

バヌアツの「居酒屋」事情

白鳥貞夫 （2004-06 バヌアツ 経営管理）

コロナ禍で居酒屋が経営の危機に立たされている。居酒屋がそれほど多いことを改めて認識し、逆に見れば「帰りに仲間喝一杯」がそれほど盛んだったとも言える。「酒」が仲間づきあいの潤滑油に使われるのは日本だけでなく、イスラム圏以外では共通の風習と言えるかもしれない。

「帰りに仲間喝一杯」が「酒」でない国がある。小生が04年～06年にSVを務めたバヌアツ共和国である。バヌアツ人はいかつい体躯と面構えだが、酒が一滴も飲めない。宗教上のタブーではなく、アルコール分解酵素が無いらしい。試しに相棒にビールを飲ませたことがあるが、一口だけで息も絶え絶えになり、翌日欠勤した。

バヌアツにも仲間と一緒に飲んで酩酊するための飲料がある。「カバ」だ。胡椒科の植物の根を石で搗り潰し、泥水状の液体を布で漉したもので、ヤシ殻の椀で飲む。この世にこれ以上不味い飲み物はないと言っても過言でなく、一気に飲みして直ちに口直ちに果物ジュースで口を漱ぐが、歯科医で麻酔されたように口内が痺れる。じっと我慢すると10分ほどで脳ミソが揺らぎ始めるが、愉快になって高声放歌が始まることはない。カバの酩酊は強い沈静作用で、ヨーロッパでは鎮静剤として投与される。そんなカバを1杯100円で供するカバ・バーの暗闇で、首を垂れてボソボソ話すだけである。（バヌアツは首都でも電気が点くところは限られる）。カバに弱い我々はハラをこわし、カバ酔いは翌々日まで残るが、職場の付き合いとあれば、誘われたら3度に1度は断れない。

そんなバヌアツにも「地ビール」がある。バヌアツ人用ではなく、首都ポートビラの白人コミュニティ向けに1日に小瓶400本を生

産していた。小生も愛飲したが、飲む度に味が違い、酔う時と酔わない時があり、浮遊物が漂っていることもあった。ある日店頭から姿を消し、デンマークで醸造を習得した白人オーナーが投げ出したと噂された。

2ヵ月ほどで地ビールが店頭に戻った。オーストラリア人が工場を買い取って設備を一新したという。ラベルの意匠



は前と同じだが、「品質第一」の文字が追加され、確かに味も酔い具合も毎日同じになり、浮遊物もなくなった。

バヌアツは南太平洋に浮かぶ人口21万の最貧国である。小生のSVミッションは商工会所でバヌアツ人向けのビジネス研修を立ち上げることだったが、ビジネスと呼べるものは全て白人と中国・ベトナム系移民が仕切っていた。バヌアツ人の8割は自給自足の村人で、残りの都市生活者も公務員かその日暮らしの人たちばかりで、ビジネス研修とは縁遠い。悩んだ末に中学の「職業」の授業を思い出し、商売のイロハから説き起こす教科書を作って講座を始めると、高卒女子（バヌアツではエリート）の事務員希望者が集まるようになり、2年目に思い切って「ISO9001講座」を開くと、役所と外資会社の管理職クラスが来て、やっと水脈を掘り当てた気分になった。

任期の終わり近くになって、バヌアツに移住したばかりのオーストラリア人のメーカーOBが講師を引き継いでくれた。その友人が地ビールの新オーナーで、ISO9001の認証を受けたので講座で工場見学に来ないかという。勿論OKで小生も同行した。輸入したペ

レット状の「ビールの元」を水に溶かし、タンクで寝かすとビールになり、濾過して瓶に詰める。タンクの温度管理と衛生管理がバヌアツ唯一のISO9001認証の中味だったが、見学者がバヌアツ人では試飲ナシもやむを得ない。

1964年まで食人の風習があったバヌアツの珍しい風物や、日

我が道 — 若者よ、より困難な道を行け —

品川 洋之助(2000-02 パラグアイ 鉱物資源調査・開発) 序



私は、ずっと前だけ見て、振り返らず生きてきました。丁度88歳になります。会員の中では、最長老と思います。最後の仕事であったシニアボランティアの会の会長を退任して既に10年となります。この10年間は、小学校の通学安全ボランティアとして、登下校時の児童の安全を確認するボランティア活動をしているところで

す。

今回は、会員だよりの欄に何か書いてくれと頼まれ、改めて、私の人生を振り返ってみました。私が、次の若い世代に資するものがあるとすれば、「私が生きてきた道」を、ひとつの具体例として示すことだと思い、書き残すことにしました。

出生から大学まで

私は、岡山県に産まれました。父は三井造船（株）の海軍の指導下にあり潜水艦の設計技師でした。母は、教育熱心な人でした。両親は、私を大学に進学させるのを当然とするような恵まれた家庭で育ちました。

それで、京都大学の理学部に入学することができました。当時の京都大学には、ノーベル賞を取った湯川博士もいて、理論物理学が主流でした。私は、抽象的な数学になじまず具体的な地質学・鉱物学科を選びました。

三井炭鉱に入社

修士卒業後、三井鉱山に地質技師として入社しました。それで北海道芦別炭鉱に赴任しました。結婚は、30歳の時にしました。相手は、地元へ帰省した時、赤穂市に住む呉服屋の娘と見合いをして、決めました。この時の妻（雅子）は、同志社女子大英文科を学んだ箱入り娘でした。この後、私と共に大きく変わってゆくなどとは、想像もしていませんでした。

オーストラリア、モウラ炭鉱に4年間赴任

1967年私は、三井鉱山本店の地質部副部長よりの電話で「モウラ炭鉱に赴任しないか」と打診があり、即答でOKしました。私は当時、34歳でした。それは、大きな挑戦でした。

当時、三井物産（株）は、日米豪のジョイントベンチャーを

本の昔話そっくりのバヌアツ民話集、ガダルカナル戦の米軍基地だったバヌアツの実話集など、ホームページ「写真で世界を巡る」<https://withcamera.jp> 内の「バヌアツ通信」でお楽しみください。

設立し、モウラ炭鉱から、鉄鋼用原料炭年産350万トンを全量買い取って、日本に供給していました。

この炭鉱の増産に伴い、地質技師として参加するのです。うまく行かない場合も考えられます。国内に居れば、それなりの年功序列で安全です。

しかし、二つの理由で、赴任を希望しました。私は、会社の中で硬直した人事管理に息苦しさを感じていました。また、炭鉱の中心である、北米の露天掘りの鉱山開発方法を実地に学びたいとも考えていました。

日本の露天掘り関連車両の日本車両やコマツの製品輸出に貢献できました。新日鉄（株）・三井物産（株）からは、直接、「品川君のおかげで原料炭の生産が順調にできる。」と喜ばれました。

雨が少ない乾燥気候に住んだのですが、待遇も良く、妻、雅子も喜んでくれました。この時から、雅子は、積極的に外に出るように変わり始めました。

ナイジェリア沖石油探鉱事業に3年間赴任

帰国後、私は、日本貿易振興会へ出向していました。この時、世の中の流れとして、遅かれ早かれ石炭から石油の方向に移っていましたので、会社には、石油開発を進めるべしという意見書を提出しました。そうしたら、生意気な奴だとかえって怒られるという事態になりました。

それで、石油の油田開発の方法を独力で、毎日会社から帰ってから、学びました。また、本や資料だけの学習だけではなく、現場で油田開発をしてみたいと思うようになりました。

そこで、1973年三井石油開発（株）等が出資していたナイジェリア石油開発（株）へ出向しました。今度は、アフリカ、ナイジェリア、ラゴスに家族同伴で赴任しました。

油田開発の方の結果は、上手いきませんでした。地震探鉱6000Km以上、試探掘井17坑を掘削し数坑で出油を確認するも、埋蔵量が不十分で、1980年には採算が合わずやむなく撤退しています。石油の場合、100の井戸を掘って3つ当たれば成功と言われていますので、これは通常の結果とも言えます。

ノールウェイ沖の油田開発プロジェクトに2年間単身赴任

その後しばらく、日本に帰って国内で勤務し、順調に昇進をしていました。

当時、ノールウェイ領北海Gyda油田の利権10%を、日本のアラビア石油（株）と三井石油開発（株）が5%ずつ取得

したところでした。三井石油開発（株）は、国内2社と石油開発公団の出資を受けて、ノールウェイ石油開発（株）を設立することになりました。

1988年、私は、油田開発の経験を買われ、現地法人の代表として、赴任することとなりました。

ノールウェイは、北海道の芦別の寒さに比べれば、暖流の影響でそれほど寒くはありませんでした。

現場は、イギリスとの中央線付近で、海の中の油井に行くのも、途中ヘリコプターが墜落することもあり、安全のためウエツスーツを着ていきました。現地には、作業の進捗状況、調査を行う時だけ飛んでいきました。

JICAシニアボランティアで2年間赴任

私は、三井石油開発（株）の定年後も2000年6月、67歳まで顧問として働いていましたが、最終的に退任しました。

この時、妻は、既に日本語教師として実績を積んでいました。妻は、私がノールウェイに赴任する前から、日本語教師としての資格を取って、企業や公共機関で日本語指導者養成講座の講師を務め、1999年3月には、フィリピンセブ島日本企業へ日本語指導を行っていました。

長い間一緒に生活していると夫婦が似てくると言われますが、妻は、日本語教育を通じて国際協力の仕事をしたいというように変わってきていました。

それで、妻は、シニア海外ボランティア（SV）の受験資料を集めていたのです。この時点では、夫から離れて生活することにはためらっていました。

そこで、私は、妻の資料をもらって、先にSVに応募することにしました。私も、このまま終わるよりは、出来れば海外で「専門知識を少しでも生かしたい」と思ったからです。

幸い合格し、派遣先は、南米パラグアイで、指導科目は、「鉱物資源調査・開発」でした。また、対象が金属鉱床となり、また大いに勉強をしなければならませんでした。

2年間、家内と共に首都アスンシオンに滞在しました。

仕事の方は、最初に、資源調査の現状をまず調べました。ドイツBGRの技術援助による非金属資源及び図幅調査、チャコ地方の衛星地質図ができていました。また、ドイツから供与の分析器具、ジープ等の機材もありました。私は、現状を踏まえて、東部地域の野外地質調査（約10日）や文献調査を行い、鉱物資源の探査ターゲットを絞るところまでを行いました。このような調査は、1、2年で成果の出る物ではありません。しかし、私は、それでの調査から金とレアアースが有望であると判断しました。

それで、私の後任には、金の採掘をしている住友金属（株）元社員小川孝雄氏（新潟出身）がふさわしいと推薦し、JICA側も了承していただきました。

私は、地球上の3つの場所で、プレカンブリアの石を実際に目で確認しています。これは最も、古い時代の岩石なので、日本では絶対に見ることはできないものです。私は、本当に貴重な経験ができました。

シニアボランティアの会の会長を7年間に在任

帰国後、同期の及川淳一氏から「千葉県内でJICAシニアボランティアのOB会を作ろう」と呼びかけがあり賛同しました。

私は、一般の人に、また極端には会社内でも、海外で苦労した事を話すことは難しいと控えていました。そこで、気兼ねなく話せるOB会の仲間とは、大切にしたいと思っていました。

2003年7月5日、「千葉県JICAシニアボランティアの会」の設立総会があり、最初の会長に及川氏がなりました。

この後、私は、2003年9月から2004年6月まで、日本語教師である妻の随伴家族としてスリランカ、コロンボに行きました。妻は、コロンボ大学大学院日本研究科の日本語講師として働き、私は、配偶者として愉快地コロンボの生活を楽しむことができました。

2004年5月、SV会長及川氏より自身のSV応募予定のため、私に次期会長を引き受けるよう要請があり、応諾し、結局7年間、2011年6月まで会長を務めました。

この間、雅子は、日本語教師として、エジプトカイロに単身赴任（2005/01-2007/05）、中国海南島海門1か月間出張2008/01、ミャンマーヤンゴン1か月間出張2008/06、スリランカサバラガムワ大学に赴任2009/03-08、ベトナムダナン、さくら日本語センター日本語講師2010/03-2011/07、と私は、ほぼひとり留守家族として日本の家を守りました。



雅子、ベトナム

私が会長を退任してからも、妻、雅子は、スリランカ、ケニア大学日本語学科講師（2014/02-2015/01）に赴任しています。素直な良い妻と結婚できたものと思っています。

結言

私の人生を振り返ってみると、失敗を恐れず、常に前向きに生きてきました。前向きにやってきたからこそ、「私は、人生を精一杯生き切った。」という満足感があります。

今振りかえってみると、子供の時に、母から「井の中の蛙」ではいけないという言葉に影響されていたのだと思います。

これからの若い人には、「常に失敗を恐れず、進め！」という精神で人生を生きてほしいと思います。私は、炭素化社会に貢献してきた人生でしたが、これからの時代は、脱炭素化社会になります。しかし、人間が果敢に生きてゆく姿勢そのものの重要性は、時代が変わっても変わらないと思います。

ドルポ・トレッキング ―河口慧海の道を辿る

竹花 晃 (2004-06 ネパール 山岳博物館運営)



はじめに

河口慧海の「チベット旅行記」を読んだことのある人は少なからずおられると思う。

慧海は、日本の仏典は漢訳を経て日本に伝わったため、原典とはかなり違っている

のではないかと疑問を抱き、サンスクリット語で書かれた仏教の原典に最も近く正確と言われた仏典を求めて、当時鎖国のチベットに向かった。そして、今から約120年前の1900年（明治33年）にネパールのドルポからチベットに越境した。

【河口慧海】

1866～1945年。1897年から1903年からの2回に渡ってインドやネパールの長期滞在を含め、当時厳しく鎖国をしていたチベットにヒマラヤ越えで潜入。多数の経典や動植物標本などを持ち帰った。

チベット旅行記では、慧海がどこからチベットに越境したかを知られると関係者に迷惑がかけると、地名など詳しくは明かさなかった。そのため越境ルートは長い間謎であった。

私が河口慧海に興味を持ったのは、2004年4月にJICAの海外シニアボランティア（SV）としてネパールのポカラにある国際山岳博物館（IMM）に着任してからである。IMMは、ネパール山岳協会により2004年に正式オープンした。設立には世界中から、中でも日本の各山岳諸団体や個人による多額の支援があった。また開設準備にはSVとして私の先代の安藤久男さんによる多大なご尽力があった。

慧海はポカラを「ネパール第一の美しい都会」と讃えている。しかし、当時の人口は少なく都会と言えるほどの規模ではないと思われる。秋から冬にかけての青空に眼前にそびえるヒマラヤは壮観である。

IMMには、1953年に榎有恒隊長率いるマナスル遠征隊で初登頂した今西壽雄のご遺族による登山用品などをはじめ、各国から沢山の展示物等が寄贈されている。IMMには河口慧海コーナーもあり、河口慧海の研究家としても知られた高山龍三先生の寄贈による展示品や、多くの書籍があった。それらの本を読んだのが慧海にのめりこんだきっかけである。

また、IMM赴任中にトゥクチェやマルファ、ムクチナートなどの慧海の滞在先にも何度となく訪れる機会があり関係者の子孫にもお会いした。



慧海が第一回チベット旅行中に綴った日記が2004年に発見され、慧海研究プロジェクトによりヒマラヤ越えの謎が解明され、チベットに越境した峠はクン・ラであろうと特定された。

ネパール滞在時代やその後も、慧海のチベット越境ルートを解明しようとした何人かの登山家や研究者にお会いして、ドルポの関心は高まった。

【ドルポについて】

ドルポはネパールの北西部に位置し、チベットとの境界に接している。主な居住地の標高は4000m前後。ネパール側からは標高5000m以上の峠や険しい谷をいくつも越えて行かねばならず、ネパール人でも普通の人が行くのは容易ではない。長らく秘境と言われてきた。住民は全てチベット系である。5000m級の国境の峠を越えればチベットであり、相互に交流がある。ネパールよりむしろチベットとの繋がりの方が強かった。

今回のトレッキングから帰った後、2019年の年末と2020年に「天空のヒマラヤ部族」というタイトルでドルポが2回に渡って放映されたので、ご覧になった方もおられるかもしれない。1回目はTV朝日開局60周年記念として、かなり質の高い番組であった。

トレッキングの概要

- ・期間：2019年 6月17日～7月24日（トレッキングの期間は6月21日～7月17日）
- ・メンバー：竹花晃、他1名の計2名
- ・スタッフ：ガイド、クック、キッチンボーイ兼ガイド補助（ガイドの息子）馬方、キッチンボーイの計5人、ラバ（ネパール語でカッチャル）6頭

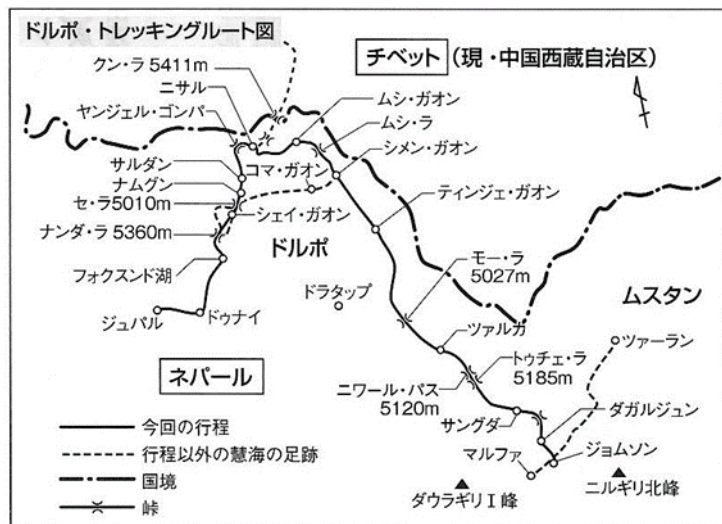
河口慧海はポカラからムスタンに入り、マルファから北に位置するツァーランに滞在した後、再びマルファに戻り北西に向かい、チベットに越境した。西側からは急激に高度を上げるため我々年寄りにはきついと思われ、徐々に高度を上げる西から東に向かうルートとした。

大きな目標の一つは慧海がチベットに越境したと言われるクン・ラ（ラはチベット語で峠の意）到達である。そしてあわよくば、クン・ラの近くの6000m級峰の登頂を狙ったが、あいにく両方とも達成はできなかった。慧海のルートとは大まかには逆コースだが、慧海が滞在したシェイグンバからクン・ラへはほぼ同じ順路である。

川喜田二郎の著作の「ネパール王国探検記」や「鳥葬の国」で知られているツァルカを訪れることも楽しみにしていた。

天候不良と予想外に厳しいルート

ヒマラヤ山脈の南側のこの時期はモンスーンによる雨季であるが、ムスタンでもジョムソンより北側になると乾燥した気候で雨は少ない。ドルポでも同じだろうと期待したが、実際は大違いであった。夜半から明け方にかけてはほぼ毎日雨が降り、行動中も午後になると夕方頃まで雨が降ることが多かった。幸いなことに雨量はそれほど多くはなかったが、晴天は少なく期待していた山の景色は余り見えなかった。



トレッキングというと簡単に思われるかもしれないが、ドルポはトレッキングというよりも、徒渉をすること数知れず、岩登り的な場所もあり、登山的な要素が高い。行程は、5000m級の峠を6ヶ回上り下りした。ルートも明瞭でない箇所も多く、ルートファインディングの勘に優れたネパール人のガイドがいないと日本人だけだと難しい。

【トレッキングとは】

トレッキングの語源は19世紀半ば、南アフリカで、オランダ系移住者たちが使っていた、「Trek」という言葉である。難儀しながら牛車で道のりと旅行する。特に苦難に満ちた移動の旅」と言う意味である。1950年代からネパールのヒマラヤ地域での標高5500m位までの長期間の山歩きに使われるようになった。しかし高所順応できないと高山病になることも多い。一般的に徒渉はトレッキングではなくて登山の範疇となる。語感が良いせいか、日本でも最近ハイキングや軽い登山などをトレッキングと呼ぶことが多くなったが、ネパールとは日数や質がかなり違う。ついでに言えばハイキングという言葉も日本では野山を歩く程度の意味に使われることが多いが、欧米ではザイルなどを使わない登山であればハイキングと呼ぶ。外来語が日本語化すると世界標準と違う意味で使われることが多い。



滑落したら谷底まで200m以上一直線というザレ場（山腹の粒の細かい砂礫地。ヒマラヤは日本よりはるかに規模が大きい）も

多く、岩登り3～4級程度でも滑落したら危険な岩場などをフリーで上り下りするなど緊張を強いられる場面も多かった。また、一部ではあるが谷の雪渓や、高所では残雪もあり楽しめた。

行動は危険な箇所はガイドと同行したが、ほとんどは自分のペースで歩ける単独行動をした。逆にルートが分からず途方に暮れたり、地図と磁石をにらんでルートファインディングに苦労し

たことは多々あった。特に霧にまかれ、ルートも見えないと悲惨である。そんな時にガイドや馬方の兄が迎えに来てくれて何回も助けられた。

【岩登りのグレード】

昔のクライマーにはなじみ深い、1級から最難度の6級までに分類するグレードシステムが使われていた。1、2級は簡単でザイルは不要。3級程度から安全のためとザイル（最近はロープと呼ぶことも多い）を使用し、トップ（先に登攀する人）はセカンド（次に登る人）に下から確保されながら（落下したらセカンドが止める）登り、ザイルの長さが一杯になるとセカンドはトップから上から確保されながら登る。最近はクライミングの変化により、違うグレードシステムを使うことが多くなった。

【シェルパ】

今回のガイド等スタッフの3名はシェルパである。シェルパには大きく分けて二つの意味がある。一つは、チベットの東の方からヒマラヤを越えてネパールに移住して高地に住み着いた人たちの民族の名称である。チベット語でシェルは東を意味し、パは人を意味する。従ってシェルパは東から来た人、という意味である。

もう一つは、英国のエベレスト登山隊の初めから高所に強いシェルパ族が高所ポーターとして重宝されて使われ、各国の遠征隊でも活躍してきた。その後も登山隊やトレッキングのガイドとしても活躍するようになり、ネパールではガイドのことを職種の名前としてシェルパと呼ぶことも多い。大分前から、昔チベットから移住してきたシェルパ以外の他の高地民族のグルン族やタマン族もガイドとして増加しているが（むしろ裕福になったシェルパは危険な仕事から離れて減少）、民族名とは関係なくシェルパと呼ばれることがある。

ジュバルからボクスンド湖

旅は、カトマンズからタライ平原のネパールガンジに飛び、さらにジュバルまで飛行機で入る。ところが天候不良により飛行機はネパールガンジで2日間欠航となった。

6月25日にジュバルで初めて全員が揃い、ドウナイに向けて歩き始めた。ドウナイからボクスンド湖のあるリングモまでは村人も利用する歩きやすい山道である。

ボクスンド湖（3600m）はこの旅随一の景勝地であり、やや緑色を帯びた青色の大きな湖は神秘的。映画「ヒマラヤ」（邦題「キャラバン」）の舞台にもなった湖である。



トゥク・サク・コーラから渡渉や峠越えが続く

トゥク・サク・コーラ（コーラは比較的大きな沢、川の意）の狭い谷に入ると、渡渉を繰り返すことになる。谷の途中には雪渓が残り、荷を積んだカッチャルには通行が困難な場所もあり、スタッフが荷を担いだ。

谷を詰め、ナンダ・ラ5360mの手前のハイキャンプで宿泊。ナ

ンダ・ラの辺りは冬虫夏草（ネパール語でヤーサグンバ）がよく採れるようで、冬虫夏草採りを終えて、カッチャルや徒歩で帰る人たちに沢山出会った。ドルポはネパールでの冬虫夏草の一大産地である。採集された冬虫夏草は中国に輸出され高価な漢方薬となる。

【冬虫夏草】

効能はネットによると、免疫力を高める、老化を防ぐ、生活習慣病の予防・改善、等々らしい。シェイガオンでナンダ・ラのキャンプ地で



取ってきた冬虫夏草を、キッチンボーイがあわよくば買ってもらおうと、食べてみると言うので、多分蛾の幼虫の部分を噛むとプチゅとして、子供の頃よく食べたハチの子（幼虫）と似た甘い味。しかしどんな水で洗ったか分からないので腹を壊したら大変と、彼がいなくなってから吐き捨てた。日本に持って帰ってもどうやって服用するか分からないし、効能も知らなかったのでもちろん買わなかった。

バツカ菌科に属するキノコ的一种。昆虫に寄生して養分を吸収して成長する。冬は虫の姿で過ごし、夏になると草になることから冬虫夏草と呼ばれる。世界中に約300種類あり、日本にも多くある。中国で冬虫夏草というと、チベットや四川、雲南、ネパールなどの3～4000m級の高山帯に6～8月頃発生するコウモリガの幼虫に寄生したキノコを指す。

6月30日はナンダ・ラ越え。霧雨の中で視界が悪く、また冬虫夏草採りの足跡が錯綜し、このエリアは初めてのガイドはルート間違えた。峠の北側には残雪が多くまた急な下りである。長い谷を下るとシェイ・スモド・グンバ（スモドは川の合流の地点の島状の場所。グンバはゴンとも言い、寺院や仏塔のことでごく小さな仏塔も多い）見えてきた。シェイガオン（ガオンは村の意）に至る道は慧海とは異なるが、奇しくも慧海もほぼ同じ6月27日に着いている。

7月1日はスモド・グンバの中を見学した後、一人で峨々たる岩山の奥にある二つのグンバを目指したが、かなりきつそうで途

中でやめた。

シェイガオンからは、5010mのセラ峠を越えてナムグンに至る。7月3日のサルダンは交通の要衝に位置した大きな村である。テント場所を借りた家の主人はアムチ（伝統医療の医者）でありラマ（チベット仏教の僧）でもある。映画「ヒマラヤ」に出演し、その監督で写真家のエリック・ヴァリの写真集にも載っており見せてくれた。弓矢を引いた精悍だった人も今は老人である。

4日のヤンジェル・グンバは大きく、ネパールでも珍しい特異な形のグンバが目立つ。既に出発時の飛行機の欠航により国境の6000m峰の登頂は断念していたが、チェックポストのアーミーによると、クン・ラは交易量が多くなり過ぎて中国側が一時的に閉鎖したとのこと。峠まで行くのは構わないだろうと思うが、ダメらしい。

5日は少しでも国境に近づこうとクン・コーラを遡り、キャンプ適地でテントを張ったが、慧海のキャンプ地よりかなり下だと思われる。



6日は、シメンガオンに行く予定であったが、馬方によるとバンジャン・コーラの道はカッチャルには通れないとのこと。予定を変更してムシ・コーラを遡りムシ・ガオンに宿泊。翌日ムシ・ラ5030mを越えてシメンガオンに出るルートに変更した。

7日にムシ・ラから下っている時にシメンガオンの手前で、今回のトレッキングで唯一他のパーティに出会った。それはジョムソン方面から来た日本からの5人の隊で、前述のTV朝日の撮影クルーの大部隊であった。我々と違いカッチャルに乗っていた。今回、彼ら以外の外国人の隊には一切出会わなかった。

次号に続く

開発が進む中国チベットとの国境沿いの村 今回のトレッキングの核心部

2021年度 役員

・会 長 三輪 達雄 (我孫子市)	・幹事 中西 陽典 (我孫子市)	・幹事 服部 正 (八街市)
・副 会 長 添野 良一 (鎌ヶ谷市)	・幹事 吉田 啓一 (多古町)	・幹事 黒田 啓嗣 (野田市)
・事務局長 高瀬 義彦 (柏市)	・幹事 佐々木 英夫 (流山市)	・特任委員 登内 明 (浦安市)
・会計監査 村田 淑子 (東京都)	・幹事 畑野 郁子 (習志野市)	(うらやす市民大学と連絡)

会員動向 会員数 78名 (2021年9月末現在)

2021年8月末現在、派遣中であったシニア海外協力隊員は、2月に中途帰国され、その後派遣されておりません。

・2021年3月から2021年8月末までに、次の方々より当会に合計9,398円のご寄付がありました。
中西陽典、小松秀世、阿部清司、弓貞子、村田淑子（敬称略） 大変ありがとうございました。